【第二回新島八重顕彰祭講演会】令和三年六月十四日於大龍寺

新島八重最大の謎に迫る―川崎尚之助の復権をめざして―

同志社女子大学特任教授　吉海直人（よしかいなおと）

エピローグ

おはようございます。只今ご紹介に預かりました吉海です。私は同志社女子大学に勤めております関係上、ＮＨＫの大河ドラマ「八重の桜」の放映が決まった後、角川書店の編集者から依頼があって、私の研究テーマとは無縁の新島八重についての本を執筆することになりました。どうして私に白羽の矢が立ったのかというと、それまで誰も本気で新島八重について論じた人がいなかったからです。そのためインターネットで「新島八重」を検索しても何もヒットしません。八重は普通の女性だったからです。そんな中、たまたま私は新島八重の懐古談を入手し、それを紹介していたので、編集者の目に止まったというわけです。

普通は次回の大河ドラマが発表されると、それに合わせていわゆる大河本がたくさん出版されますね。ＮＨＫの大河ドラマは、出版業界にとってもドル箱になっているようです。ところが「八重の桜」の場合は、なかなか本が出ませんでした。それ以上に脚本もなかなか完成しなかったようです。どうしてかというと、新島八重に関する伝記資料が乏しくて、一冊の本にできる分量にならなかったからです。

私は八重の懐古談を四種類も手元に持っていたので、意外にさっさと本にすることができました。そんな中、本会の幹事長である岩澤信千代さんも、私と同時期に『不一』という八重の本を出版されており、縁あって会津若松で出会いました。葵高校の鎌田先生、室井市長、そして宮子さん、みんな「八重の桜」でご縁をいただいた方々です。ですから「八重の桜」終了後も、せっかくいただいたご縁なので、なんとか続けたいと思っていたところ、岩澤さんから新島八重顕彰会設立の話があったので、喜んで協力させていただくことにしました。岩澤さんがいらっしゃるからこそ、新島八重顕彰祭もこうして開催することができたといえます。この場をお借りして、一言お礼を申しあげます。

また顕彰会立ち上げの際、八重だけでなく兄の覚馬も一緒に顕彰しようという趣旨だったので、それはよいことだと思っていたところ、これも縁があったのか、「管見」という貴重な覚馬の写本が入手できました。現在この本は写本三本が知られていますが、そのうちの二本は公的機関の所蔵なので、個人で所蔵しているのは私だけです。その八重と覚馬に関わるのが同志社の高祖新島襄ですが、もう一人きちんと顕彰しなければならない人として「川崎尚之助」があげられます。本日は短い時間ですが、八重の最初の夫である尚之助について

お話させていただきます。

一、会津藩にやってきた川崎正（尚）之助

まず覚馬と尚之助の出会いです。江戸に出て勉学に励んでいた覚馬は、大木忠益の塾に入門します。そこに尚之助もいたことがわかりました。資料にあげていますが、西田長寿著『大島貞益』（実業之日本社・昭和二十年十一月）を見ると貞益の長兄貞敏の紹介文の中に、

安政三年十九歳の時、洋学修行の為め江戸に出て、芝浜松町の医師大木忠益の家塾に入つた。当時その塾生には大鳥圭介、加藤弘之、川崎正之助等がゐたといふ。（7頁）

とあって、大木塾の塾生の中に川崎正之助の名前が出ていたのです。要するにこの大木塾が覚馬と正之助の接点だったのです。

覚馬は安政三年（一八五六年）に会津に戻り、ただちに日新館の教授となって蘭学所を開設します。その教授として、江戸の塾で知り合った優秀な蘭学者・川崎正之助を招きました。ただし出石出身の正之助が、そう簡単に会津藩に藩士として召し抱えられるはずはありません。これが正之介助のことを考えるポイントです。もっともその頃は人材不足だったのか、才能ある人物は特別に採用されていたとも考えられます。そうとも考えないと、正之助の「正」を藩祖・保科正之に憚って尚之助に改名したりはしないはずだからです。

幸い会津市立図書館に所蔵されている「御近習分限帳」（明治二年）に、「十三人　砲術　河崎尚之助」とあり、また「御近習人別帳」（明治四十三年）に、「拾三人　大砲方頭取　河崎尚之助」とあることから、尚之助は大砲方頭取十三人扶持であったことが証明されました（「河崎」と「川崎」の違いは問題になりません）。

とはいえ、藩士となり山本八重と結婚した後も一家を構えて独立しておらず、相変わらず山本家に居候しているというのはどうなのでしょうか。あるいは屋敷を与えられない臨時雇いのような身分だったのかもしれません。というのも古川末東氏の記述の中には、

覚馬其才の卓抜なるを知り、家に留めて我藩に薦む。藩給するに四口俸を以てし教授を嘱す。尚之助曰く不肖人の師たるに足らずと雖尽す所あらん。今や寄食其人ありと口俸を辞す。藩乃ち金若干を蘭学所長野村監物に付し之を贈らしむ。

（「会津会会報」二〇・大正十一年六月24頁）

とあります。ここにある「口俸」は禄と違う特別手当ですから、正式に仕官したのではなく教授として雇い入れているのかもしれません。そしてこれが会津藩士ではないという根拠になっている可能性もあります。

二、従来の尚之助についての見方

ところで「八重の桜」で、八重が再婚だという事実は全国的に知れ渡りました。同時に前夫尚之助に対する関心も高まったかと思います。長谷川博己の演技はよかったですよね。実は同志社のみならず、会津若松市においても、尚之助についての関心は低かったですよね。いや低いどころか、冷たかったとさえ言えます。その第一の原因が、尚之助は会津藩士ではないと見なされていたからです。そのため鶴ヶ城開城に際し、会津藩士以外は無罪放免になっているので、尚之助はそれ以来八重と別れて行方不明になったと説明されてきました。

例えば福本武久氏『会津おんな戦記』（筑摩書房・一九八三年七月）では、

「ところで、藩家に縁のない者は、明朝開城に先立って城を去ることになっているのを存じておられるか？」（中略）「尚之助さまのことでございますね」尚之助は良人であっても藩士ではない。（中略）藩士でもない良人が砲隊を指揮することができたのは、蘭学と舎密（せいみ）術の知識があったからである。春英はその才を惜しんで会津を去る決心を促すように告げたにちがいない。

（184頁）

云々と、藩士でないことを前提（鵜呑みに）にして、ストーリーが展開されています。また吉村康氏『心眼の人山本覚馬』（恒文社・一九八六年十二月）でも、

その夕方、夕餉が終った時刻に、夫の尚之助が姿を見せた。「明朝、日の出前に城を出ることになった」。佐久と宇良が驚いた顔で尚之助を見上げ、それから八重子を見つめた。「藩家とゆかりのない者にまで累を及ぼすまいとの老公のおぼしめしですが、いまさら私にまで城を去れとは……」。尚之助は顔を歪（ゆが）めて、唇を噛んでいる。ふり返れば、尚之助が会津の土を踏んでから九年、八重子と夫婦になってから三年余の歳月が経っていた。藩士に取り立てられることはなかったけれど、尚之助が会津の地に骨を埋める気持になっていたとしても不思議ではなかった。

（158頁）

と、やはり藩士になれなかったことを前提として話が進んでいます。こういった記述は、必ずしも小説家の自由創作ではなく、それ以前の書物（郷土史）を無批判に引用したことでそうなったのかもしれません。その延長として、昭和六十一年に日本テレビで放送された『白虎隊』（八重は田中好子）では、川崎尚之助を「逃げた男」「他藩の人間」としていますが、それが尚之助の受け取られ方だったのです。

三、尚之助は歴とした会津藩士

しかしそれは完全に誤りでした。「八重の桜」効果によって、尚之助が会津藩士であった証拠資料が次々に発掘されたからです。尚之助は、開城（敗戦）後も歴とした会津藩士として東京で謹慎生活を続けた後、一八七〇年（明治三年）に斗南藩士として斗南（青森県）に

移住していたことが明らかになりました。ですから会津若松市では、そのことをきちんと再検証し、あらためて尚之助を会津藩士・斗南藩士として復権させていただきたいのです。会津若松が放置していたことから、兵庫県豊岡市が尚之助に目を付け、豊岡出身として大々的に観光宣伝に使っています（供養塔や尚之助という純米酒まで販売しています）。

しかしながら尚之介は会津の方がふさわしいと思います。資料も会津に残っています。会津市立図書館に所蔵されている「元斗南藩貫属各府県出稼戸籍簿」の「羽前国米沢県管内」中に、

城下内藤新一郎方出稼／川崎尚之助妻／辛未年廿七／合一人女

とあることが浮上しました。「辛未（しんび）」は明治四年のことです。「貫属」とは所属していることです。「出稼」とは他藩で生活することでしょう。米沢の「内藤新一郎」はかつて尚之助から砲術を学んでおり、その縁で八重一家を受け入れたのだと思われます。

この記述によれば、明治四年の時点で、八重はまだ川崎尚之助の妻だったことになります。戸籍簿の不備ということも考えられますが、離別を証明する資料も見つかっていないようなので、まだ離婚していなかったと見ておきます。そのことは八重の家族のことが、

城下内藤新一郎方出稼／山本権八妻　辛未（しんび）年六十二／娵（よめ）　同三十五／孫娘　同十／伯母　同六十八／合四人女

と別にあることによっても証明されます。この四人は母佐久と覚馬の妻うら、娘の峯のことです（伯母については未詳）。仮に八重が離縁して山本家に復籍していたら、八重は「山本権八娘」としてここに記述されていたはずです。同じところに居住しながら「川崎尚之助妻」とあるのは、戸籍が別になっていたからとしか考えようがありません。

こうなると八重の離縁は鶴ヶ城開城時ではなかったことになります。その直後、兄覚馬を頼って米澤から京都に移住した際、改めて覚馬の戸籍に入ったとしたら、その時点で川崎尚之助との離縁が成立したことになりそうです。少なくとも明治六年の尚之助の裁判調書に「独身」とあるので、それ以前（明治五年頃）に二人の離婚が成立していたことになります。

四、会津藩士の証言

実は尚之助については、会津藩士の広沢安任が覚馬について書いている『近世盲者鑑』（博聞社）明治二十二年十一月刊に、

河崎尚之助は但州出石の人なり。故ありて藩に来る。亦蘭書を学び技術に長せり。覚馬相得て大に悦び延（ひい）て之を其家に寓せしめ共に講習切磨せり。（12頁）

と出ていました。これを見ると尚之助は覚馬の家に仮寓していたことがわかります。

また「会津会会報」二〇・大正十一年六月には、古川末東氏が尚之助の消息を聞書として

語っています。そこには次のように書かれている。

川崎尚之助は初め正之助と称し、尚斎と号す。但州出石藩医師の子なり。我藩に来り藩祖土津公の諱を避けて之を改む。〈中略〉尚之助は性洒落才気縦横適々として可ならざるはなし。和歌を能くし且つ翰墨に巧みなり（大沼親光談）。斗南に移りし後、大に為す所あらんと欲す。而て事外人に連り却て累を受けしが、事遂に解く（小川渉筆記）。廃藩の後、東京に出て浅草鳥越に寓す。赤貧洗ふが如く三食猶且つ給せざるに至る。〈中略〉尚之助の鳥越に在るや従容として吟詠自ら遺る。曾て左の狂歌を詠ず（大沼親光談）

このごろは金のなる木のつな切れてぶらりとくらすとりごえの里

今日はまだかてのくばりはなかりけり貧すりゃどんの音はすれども

其字頗る巧妙以て才藻の一斑を窺ふに足らん。然れども毎に稿を留めず。故に散逸して伝はらず。真に惜むべきなり。

明治八年六月下浣（下旬）病て東京に没す。享年三十九。浅草区今戸町称福寺に葬る。子なし弔祭するものなし。

（「古川春英と川崎尚之助」）

この二つが尚之助に関する会津藩側からの古い情報です。これによって出自が出石藩の医師の子であること（藩士とも藩医とも書いありません）、「正之助」の「正」という漢字を、藩祖・保科正之公に遠慮して「尚」に改名したこと、狂歌を詠んでいること、書が巧みだということ、明治八年に東京で亡くなったこと、享年三十九だったこと、そして浅草の称福寺に埋葬されたことなどがわかります。これまで尚之助の出自を出石藩士あるいは藩医の子としているものがありますが、それはこの文面を曲解したもので、他に有力な証拠は一切見当たりません。ところで記事の中に、尚之助が斗南に移住した後、「事外人に連り却て累を受けし」とあるのが気になりますね。少なくとも小川渉氏は、尚之助が国際裁判にかかっていることを承知していたと思われます。

ついでながら小川渉氏『会津藩教育考』（会津藩教育考発行会・昭和六年）にも、「古川春英川崎尚斎」項があります。そこには「尚斎は初め正之助といふ。我藩に来り土津神君の諱を避て荘之助と改」「尚斎は性灑落胸中一物なし。斗南に移るに及て為すことあらんと欲し外人に謀りしが、其事遂に敗れて却って累を来せしが事解け明治八年東京に於て死せり」「尚斎が墓は東京今戸町の某寺にありき」（561頁）と微妙に修正されて掲載されています。それにしても尚之助のことが会津藩の記録に書かれているのですから、今までなぜ尚之助のことが話題にならなかったのか、不思議でなりません。

五、斗南藩での尚之助―自己犠牲の人

「八重の桜」効果というのか、歴史作家のあさくらゆう氏によって、札幌の北海道立文書館にある尚之助の裁判記録が発見・報道されました。また鶴岡市郷土資料館の阿部正己文庫にも「斗南縣川崎尚之助ヨリフライキストンに係る廣東米　差縺　一件書類　函館支庁外事

課」が所蔵されていることがわかりました。

資料は前からあったのですが、それまで誰も調べなかったのです（目録も整備されていませんでした）。これらの資料によれば、尚之助は現地で藩士達の飢えと困窮を知り、それを打開するために明治三年に柴太一郎（柴兄弟の長男）らと斗南から函館に渡り、外国（デュース）との広東米（外米）と大豆との先物取引に手を染めたようです。それは尚之助が「開産頭取」という役職だったからでした。ところが仲間（斗南藩商法掛）と思っていた米座省三に騙され、手形を横流しされたことで、米が入手できなくなりました。それによって先物取引も契約不履行となり、英国人のブリキストンとデンマーク人のデュースと二重の損害賠償の訴訟（国際裁判）が生じたのです。それは明治四年、今からちょうど百五十年前のことでした。

デュースからの詐欺罪による損害賠償の訴訟で、尚之助は二百五十両もの支払いを命じられました。しかし当時の斗南藩にそれだけの賠償金を支払う余裕などありません。やむなく藩（山川大蔵・辰野宗城）は尚之助を藩とは無関係だと切り捨てました。尚之助もまた自分が勝手にやったことだと主張し、一人で罪を被りました（当然八重とも離別）。それがわかる文書が開拓使公文録（北海道立文書館所蔵）に残っていました。

私義一昨午年十月中　爰元　着港之　砌　丁抹国
デューズ外亀屋武兵衛ト廣東米拾五万斤取組
申候所右者　畢竟　斗南藩ヨリ穀配之命令
ハ更ニ無之候得共多人数之飢餓傍観難
黙止　ヨリ全ク自己之存意ニ任セ取組申候右御尋
ニ付此段申上候以上

元斗南藩
壬申六月　川崎尚之助
外務
御役所

本来は専門の舎密（理化学）の知識を活かして、鉄を溶かす反射炉（溶鉱炉）を製造する予定でした。ところが尚之助は私利私欲ではなく、人々が飢えているのを傍観できず、なんとか食料を調達しようとして明治三年に函館に渡ったのです。結果的に失敗しているものの、こんな立派な人物を犯罪人のまま埋もれさせておいていいはずはありません。朝敵という会津藩の汚名も既に雪がれているのですから、今度は是非尚之助の汚名を雪いでほしいと心から願っています。

六、『心眼の人山本覚馬』は創作

なお吉村康著『心眼の人山本覚馬』（恒文社・一九八六年）には、明治六年に小野組転籍事件の裁判で敗訴・収監された槙村正直を救うために、八重に付き添われた覚馬が上京した

折、偶然人力車の車夫をしていた川崎を見かけ、その住まいを二人で訪ねるシーンがあります。少々長くなりますが興味深いので引用しておきます。

川崎尚之助の居場所が判ったのは、それからまもなくのことである。鶴ヶ城落城ののち、いったん下北半島へ向かった尚之助は、やがて失意のうちに東京へ出てきたが、適当な仕事もなく、いまは下谷の鳥越というところで、車を曳いたり、子供に勉強を教えたりしているという。雪が薄く大地を染めた寒い朝だった。覚馬は八重子とともに神田川を渡り、鳥越の里に川崎尚之助を訪ねていった。希望するのなら京都へ迎えてもよい—そう思ったからである。会津では、約束の仕官をかなえることができなかった負い目が覚馬にはあった。

しかし、崩れかけた長屋に訪ねあてた尚之助は、もう以前の尚之助ではなかった。

「そんな気力など、私にはありませんよ。俥曳(くるまひ)きか寺子屋の師匠ぐらいがちょうどいいんです。もう放っておいてください」

万年床がひいてある火の気のない部屋に、尚之助は無気力に坐っていた。

八重子は悲しそうな目を向け、

「ねえ、もう一度だけ、がんばってみる気になってくださいませんか」

といったが、尚之助は首を振るばかりだった。

「気が変わったら、いつでも京都へ訪ねてきてください。よろしいですね。尚之助さん」

住所を書いた紙片を札入れの上にのせて、覚馬はそっとあがり框(かまち)のところに置き、八重子をうながして外へ出た。

（248頁）

臨場感溢(あふ)れるすばらしい描写ですね。ちょうどこの時期、川崎尚之助も東京にいたはずなので、二人が接触した可能性は否定できません。ただし尚之助は仕官がかなわなかったのでも車夫をやっていたのでも、寺子屋の師匠をしていたのでもありません。裁判の被告人であることが判明したのですから、これをこのまま鵜呑みにすることはできません。保護観察の身で自由に京都に行けるはずもないし、覚馬が裁判の手助けをした形跡もありません。このあたりのことはまだ闇の中なのです。

七、『ある明治人の記録』の奇妙さ

それだけではありません。それ以上に奇妙なことがあります。この事件に関しては、これまで柴太一郎の美談として語り継がれてきました。著名な石光真人(いしみつまさと)編著『ある明治人の記録会津人柴五郎の遺書』（中公新書・一九七一年五月）には、

斗南藩たちまち糧米に窮し、藩士を養う能わず。三万石は名のみにて七千石ようやくなり。協議の末、太一郎兄使者となりて箱館に渡り、デンマルク領事ブリキストンより糧米(りょうまい)を購入す。しかるに仲介者たる貿易商人米倉某なる男、藩よりの支払金を横領し

逃亡せり。デンマルク領事は藩政府を相手どり賠償を請求せるため、太一郎兄は迷惑の藩におよぶを怖れ、自ら責任をとり、おのれの仕業なりと主張す。しかるに領事は藩の責任なりとして訴訟せるため、太一郎兄捕われて東京に護送さる。兄の義侠により藩政府は莫大なる賠償を免れ、司法当局も兄の心情に痛く同情し、情状を酌量して、係争の長きにかかわらず、寛大なる禁固に処す。

（61頁）

と、事件の顛末が記されています（デンマルク領事ブリキストンはデュースの間違い）。奇妙なことに、前述の柴太一郎と米倉某（米座省三であろう）の二人が事件の当事者として上げられているものの、肝心の川崎尚之助のことについては一切記されていません。

そのため尚之助の存在は完全に捨象されています。しかし裁判記録（開拓使公文録）に、

日本斗南藩　米坐（よねくら）省三川崎尚之助並柴太一郎違約に付出訴書面相添へ差進候間右事件御穿鑿（せんさく）之上急速治定いたし候様御取扱相願候拝具謹言

丁抹国代弁領事　イ・ヱチ・デユウス

と、はっきり尚之助の名前も記載されているし、太一郎より前に尚之助が記されているのですから、今後は尚之助を中心に据えた形で書き改められるべきではないでしょうか。これは単に尚之助の汚名を雪ぐというだけでなく、藩士を見捨てた会津藩そのものが厳しく問い直されることになります。ある意味「八重の桜」は両刃（もろは）の剣だったのです。

尚之助の命日についても、北海道立文書館に裁判記録の写しが残っていました。

青森縣士族　川崎尚之助

右之者兼而御届ケ申上候通り病気ニ罷（まかり）在候処午後三時頃死去仕候仍是即刻御達シ申上候也

青森縣士族　根津親徳

三月廿日

開拓使御中

亡くなった場所は東京医学校の病院（現三井記念病院）です。これによって尚之助は「会津会会報」にあった明治八年六月下旬ではなく、同年三月二十日に慢性肺炎で亡くなったことが明らかになりました。既に明治四年七月十四日に廃藩置県が行われていたので、旧斗南藩には死亡通知が送られず、そのため命日にずれが生じているのかもしれません。あるいは意図的に尚之助の真実を隠蔽しているのでしょうか。「会津会会報」には「事遂に解く」とありましたが、尚之助は被告人のまま亡くなっていたのです（それも解決なのかもしれませんが）。既に八重と別れて身よりもなく、斗南藩からも見放された彼の亡骸（なきがら）は、無縁仏のように葬られたことでしょう。出身地である出石にも知らせはなかったはずです。こういった尚之助の生き様を、誰かドラマに仕立ててはもらえないでしょうか。

一方八重は、その一ヶ月後（四月頃）に運命的に襄と出逢い、十月十五日に婚約、翌年一月三日に結婚しています。八重の心中が知りたいところです。「八重の桜」では、襄のプロポーズに対して、八重は尚之助のことが忘れられないからと断わっています。すると襄は、

結婚しても尚之助のことを忘れないでほしいと八重に頼んでいました。この一言で私はオダギリジョーのことが大好きになりました。ただしこれは脚色であり、八重が尚之助について語ることは生涯ありませんでした。語り部の八重は、何故前夫のことを秘して語らなかったのでしょうか。それが最大の謎なのです。

まとめ

以上、八重の前夫川崎尚之助に焦点を絞り、鶴ヶ城開城後の消息を資料に基づいて述べてみました。尚之助についてわからないことを箇条書きにすると、

1尚之助の素性（出自）がほとんど不明。（生年月日も未詳）

2八重と尚之助がいつ結婚したのか不明。

3結婚後二人が独立した家庭を持ったのかどうかも不明。

4尚之助と八重がいつ離縁になったのか不明。

があげられますが、資料不足でどれも解明されていません。ということで、川崎尚之助の伝記を記すことはできそうもないのです。会津における八重と尚之助の新婚生活についてもわかりません。八重は何故尚之助のことを語らなかったのでしょうか。八重が秘かに尚之助のことを書き残してくれていたら、と思わないではいられません。

〈参考文献〉

1広沢安任『近世盲者鑑』（博聞社）一八八九年十一月

2古川末東氏「古川春英と川崎尚之助」会津会会報二〇・一九二二年六月

3牧野登氏『紙碑・東京の中の會津』（日本経済評論社）一九八〇年

4吉海直人「新島八重のブラック・ホール―前夫・川崎尚之助のその後―」新島研究一〇三・二〇一二年二月

5吉海直人「前夫・川崎尚之助の新事実」『新島八重愛と闘いの生涯』（角川選書）二〇一二年四月

6伊藤哲也氏「八重と覚馬と尚之助」歴史春秋七五・二〇一二年四月

7竹内力雄氏「山本八重の前夫・川崎尚之助について」維新の道一四五・二〇一二年四月

8竹内力雄氏「新島八重の前夫・川崎尚之助の終焉（一～六）」ドウシシャタイムズ六七六・二〇一二年四月十五日～六八一・二〇一二年十月十五日

9伊藤哲也氏「山本八重―前夫の素性」歴史通一九・二〇一二年十月

10.あさくらゆう氏「知られざる八重の夫・川崎尚之助晩年の真実」『新島八重を歩く』（潮書

房光人社）二〇一二年十月
11. 伊藤哲也氏「八重と覚馬と尚之助（二）」歴史春秋七六・二〇一二年十一月
12. 竹内力雄氏「八重の夫川崎尚之助の真実」会津人群像二二・二〇一二年十一月
13. あさくらゆう氏『川崎尚之助と八重』（知道出版）二〇一二年十二月
14. 伊藤哲也氏「八重と襄と尚之助（一）」歴史春秋七七・二〇一三年四月
15. 竹内力雄氏「川崎尚之助攷」同志社時報一三六・二〇一三年十月
16. 伊藤哲也氏「川崎尚之助」会津人群像三三・二〇一六年九月

【新島八重顕彰会ホームページ】

・吉海直人の八重講座19.「川崎尚之助のその後」

・吉海直人の八重講座番外編7「八重の夫川崎尚之助」